Ⅱ　子ども手当の使いみちと家計

（１）子ども手当は「全額貯蓄」か「全額支出」に二分

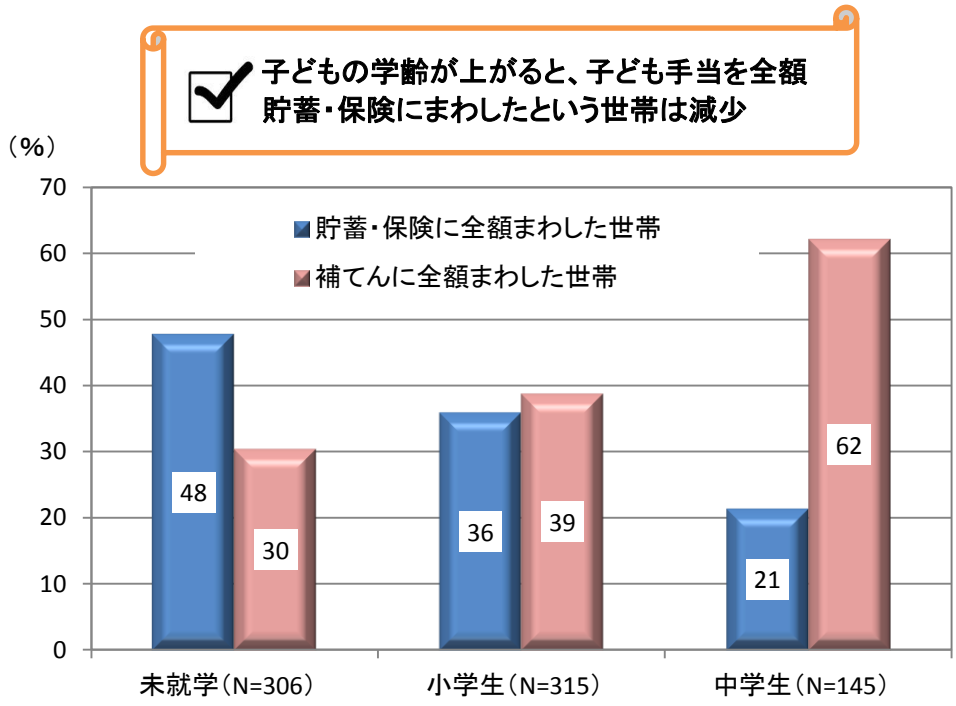
2010 年 4 月から導入された子ども手当は、個々の家計ではどのように受け止められたのだろうか。

まず、子ども手当の使途をたずねたところ、回答は子ども手当を「全額貯蓄・保険にまわした」か、「全額を子どものための支出にまわした」に大きく二分された。全額を貯蓄・保険にまわすと回答した世帯（「貯蓄世帯」）は、全体で 37.9%であった。一方、貯蓄・保険には残さず、全額を子どものための支出の補てんに充てたという世帯（「補てん世帯」）は 39.8%であった。

図表Ⅱ－1 には、一番上の子どもの学齢別に、「貯蓄世帯」と「補てん世帯」の割合を示した。子どもが未就学の世帯では、約半数の世帯が全額を貯蓄・保険に充てると回答しているが、学齢が上がるにつれ、その割合は減少する。また、全額を補てんに充てるという世帯は、中学生で大幅に増えている。

相対的に生活費や教育費の額が小さい未就学児や小学生の世帯では、子ども手当を口座に「そのままにしている」世帯は少なくないようである。ただし子どもの成長に伴い、「そのままにしている」ことができる世帯の割合は減少していく。

図表Ⅱ－1　一番上の子どもの学齢別　子ども手当の貯蓄世帯/補てん世帯の割合



（２）子ども手当の家計への影響――小学生のいる世帯

では、子ども手当の給付は、家計行動に変化を及ぼしたのだろうか。ここでは、一番上の子どもが小学生の世帯を対象に、9 月の家計について、前年 9 月の家計からの変化をみてみた。特に、子ども手当を全額貯蓄・保険に充てた世帯（「貯蓄世帯」）と、全額を子どものための支出の補てんに充てた世帯（「補てん世帯」）の違いを、子どものための支出や貯蓄に注目して比較してみる*。

図表Ⅱ－2 をみると、「子どものための支出」が大きく増加している様子はうかがえない。つまり、どちらのタイプの世帯も、子どものためだけの支出を前年以上に増やしているわけではないようである。1 年という短期的なスパンでみれば、子ども手当は子どもへの支出を（追加的に）増やしたわけではないといえる。

なお、「貯蓄世帯」の方が、「家族全体のための支出」の伸びはやや大きい。子どものための貯蓄に相当するお金が定期的に給付されているという認識が、この部分の支出増加につながったと考えられる。

図表Ⅱ－2　貯蓄世帯と補てん世帯の家計比較

	貯蓄世帯（N=113）		補てん世帯（N=122）	
	実額（9月分）	前年との差分	実額（9月分）	前年との差分
収 入（世帯・手取り）	34万5千円	9千円	35万4千円	2千円
支出（生活費＋ローン）	26万9千円	1万3千円	29万9千円	1千円
家族全体のための支出	13万6千円	1万5千円	14万5千円	7千円
子どものための支出	3万2千円	▲0円	3万0千円	1千円
貯 蓄	6万3千円	1千円	4万5千円	2千円
子どものための貯蓄	1万0千円	▲2千円	7千円	▲0円

＊子ども手当の導入により、多くの世帯では給付額が児童手当よりも増加している。なお、手当の給付月は 2、6、10 月である。また子どもが一年成長している影響等により、同一家計の前年比は支出増となることが一般的である。